あとがき

本稿はもともと、「ひまわり」という俳誌の求めに応じて、昭和四十九年の八月号から、同誌に連載した気まぐれな文章が主で、題名も「べにばな漫稿」といったのである。読者が、ほとんど俳句をたしなみ、俳境を語りあう同人の人々であるから、できることなら、その心にも添う、趣味の豊かなものをと心がけて、ペンをとったが、毎月のこととなると、胸中いくらさがしても、やがてその種も尽き果て、随所に、その雑誌、その読者に、似つかわしくない内容のものが、いかにも不風流な文章で綴られていることが、あまりにも多く目につく。そんなわけで、これをまとめて、一本にしてみようとする気持ちなどは、さらさら無かったのである。

ところが、去年あたりから、河北町が「べにばなの里」という、優雅なイメージ作りを打ち出し、熱心にその運動を進めているが、その途次、私のこの駄文に着目、できれば、その運動のたしにもしようとする、だいそれた計画が、持ちあがったらしく、やがて私の耳にも、おりふし聞えて来たのである。しかし私は、その都度、固く断わっておいたのであった。

もともと、六十篇ほどのこの文章は、一篇ごとの読み切りを主とした随筆で、

全体をとおしての筋といったようなものはない。毎月、締切りにおわれて、その場の一時しのぎに綴った、いわゆる漫稿であって、一貫して、「べにばなの心」といったような、優雅さをとらえているものでもないから、私としては、本意のものではないのである。

しかるに、その構想にあたっておられる鈴木町長さんの熱意にひきこまれて、ついに具体化するにいたったので、不本意な私も、遂にその好意を有難くお受けせざるを得なくなった次第である。

本稿は前記のとおり、二、三の連続もの以外は、相互間に何らのつながりもない。それぞれの話が独立しているので、パラッと開いて、目当り次第に読んでくだされば よい。したがって、「べにばな」として、まとまって、読者の心に残るものは何もないであろう。ただ漫然と読んでもらえれば、それだけ私は満足なのである。

最後に、高陽堂、田宮印刷所に深く感謝すると共に、その渉外にあたってくれた県史編纂室の北畠教爾氏と、町の企画情報課の皆さん、題字や写真の心配をしてくれた町図書館長の労を多とするものである。

昭和五十五年六月二十二日

七十九回の誕生日に

今田信一

著者略歴

・明治三十四年　山形県河北町生
・現在　山形県史編纂会議委員
　河北町誌編纂委員長
・主な著書
　最上紅花史料
　山形県史農業編
　河北町の歴史（上・中）
　最上紅花史の研究
・山形県西村山郡河北町大字田井六一

べにばな閑話

1980年8月1日　発行
定　価　2,300円

著　者　今田信一
発　行　山形県河北町
発売元　高陽堂書店
　山形市旅篭町3丁目2—11
印　刷　株式会社 田宮印刷所
　山形市立谷川工業団地
製　本　中山製本

© Shinichi Konta 1980

べてばな問話

今田信一